

古事記 (2)

ツギニナリシカミノナ クニノトコタチノカミ

次成神名 国之常立神 訓常立 亦如上 (常を訓じて 亦上の如し)

ツギニトヨクモノカミ コノフタハシラノカミまたヒトリガミニシテ

次豊雲野神 此二柱神亦独神坐而

ミラカクスナリ

隱身也

ツギニナリシカミニナ ウヒチニノカミ ツギニナリシハイモスヒチ

次成神名 宇比地邇神 次妹須比智

ニノカミ ツギニツノクヒノカミツイデイモ

邇神 此二神 名以音 を以てす 次角杙神 次妹

イクグヒノカミ

活杙神 二 (ふたは 柱 しら)

ツイデ オホトノチのカミ ツギハイモ オオトノベノカミ

次意富斗能地神 次妹大斗乃弁神

此二神名 (この二神名 亦以音 を以てす)

ツギニ オモダルノカミ ツイデ イモ アヤカシコネノカミ

次於母陀流神 次妹阿夜訶志古泥神

此二神名 (この二神みな 皆以音 音を以てす)

ツギガイザナキノカミ ツギニイモ イザナミノカミ

次伊邪那岐神 次妹伊邪那美神 此二神名亦 以音如上

(この二神名亦音を以てすること上の如し)

カミノクダリクニノトトタチのカミヨリシモ イザナミヨリマエラ

上伴自国之常立神以下伊邪那美以前

アハセテ カミヨ ナナヨ トヨブ

并称神世七代 上二柱独神各云一代 次双十神各合二神云

(上の二柱は独り神にして各々一代という 次にたぐえ るとおの神は各々二柱の神を合わせて一代という)

別格の五柱の神が現れては消えた(土中に潜って根となった)あと、さらにつぎつぎと天つ国に神々が生まれて行く。それは、あたかも草木が実をつけて元の茎から離れて行くように、登場し、名を呼ばれ、入れ替わって行く。

こういう名前を羅列する語りは、古代の伝承形式の基本形、世界中の諸民族の説話伝説に見ることが出来る。

日本列島の古代伝承でも同じ語りをしてきたことは大切にしたい。現代人の感覚からは無意味に思われるこの長々しい羅列がどんな重要な役割を果たしていたか、軽々しく判定しないほうがいいだろう。人びとはこの長々しい名前の羅列を楽しんだのだ(ここにも当時の人びとの美に対する欲望の動きが働いていることを受け止めておきたい)。それは、声を挙げて読み、それを聞くという動作の連鎖のなかで楽しまれた。この名前を読み上げる行為は古事記のなかでなんども繰り返される。そして、次第に歌謡に取って代られて行く。この移動は、人びとの関心が美から利へと変って行くのと応じ合っている。名前を読み上げることとは声を聞くことであって音を聞くことではなかった。おそらくこの名前を読み挙げなら、その語り手(謡い)と聴き手は、ともに踊るような大きな身振りをし合っていただろう。やがて「声」から「音」を聴き分ける習いが育って行く。「声」は内から出、「音」は外から出す。

古池やかはづ飛び込む水の音 芭蕉
草かすみ水に声なき日暮れ哉 蕪村

ココニアマツカミモロモロノミコトモチイザナキノミコトイザナ
 於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那

ミノミコトフタハシラカミニコノタダヨヘルクニヲオサメカタメヨト
 美命二柱神修理固成是多陀用弊流之

アマノスボコヲタマヒテコトヨセタマヒシユエニフタハシラノカミ
 天賜天沼矛而言依賜也 故二柱神

立 訓立云
多志 （立を訓じて多
多志という） 天浮橋而

ソノスボコヲサシオロシモチテエガケバ
 指下其沼矛以画者

シオコヲコロコロニ カキナシ
 塩許袁呂許袁呂邇 此七字
以音（を以てす） 画鳴 訓鳴云
那志

テヒキアグルトキソノホコサキヨリシタダレオツルシオノルイセキ
 而引上時自其矛先垂落塩之累積

シマトナルコレオノゴロジマ

成嶋 自淤以下
四字以音（字音を以てす）
 ソノシマニオリマシテアマノミハシラヲミタテヤヒロノデンヲミタテ

於其嶋天降坐而見立天之御柱 見立八
 リココニソノイモイザナミノミコトニトイテイハク ナガミ

尋殿 於是問其妹伊邪那美命曰 汝身
 ハイカニナレルヤコタヘテイハクワガミハナリナリテアハザルトコロ

者如何成 答曰吾身者成不成合処
 ヒトトコロアリ シカシテイザナキノミコトツゲルニワガミハナリ

一処在 爾伊邪那岐命詔 我身者成
 ナリテアマリシトコロヒトコロアリ ユエニコノワガミノアマリシ

成而成余処一処在 故以此我身成余
 トコロモチテ ナガミノナリアハザルトコロヲサシフサギテ

処 刺塞汝身不成合処而
 モツテクニヲウミナサン ウムコトイカン

以為生成国土生奈何 訓生云字
牟下效此（生を訓じて字牟と
云う下此に倣う）

伊邪那岐と伊邪那美の二神が生まれるまで、古事記では十六柱の神が先立ち、神世七代を経過している。日本書紀では、本編で十柱が先行し、やはり七代に分けられる。そうして七代目陽神（おがみ）と陰神（めがみ）が天つ国の神々の命を受けて、

淤能基呂嶋の創出を企てる。「天沼矛」は絵筆か鑿の喩である。それを持って天と多陀用弊流之国に架けた橋「浮橋」の上から島の図様を「画（えが）」いたのである。

伝統的に「画」は「かく」掻く」の意味に解釈されてきたが、それでは太安万侶がわざわざわざ「画」の字を選んだ理由が汲めていない。ここは描くの「画」と読まねばならない。つぎの「画鳴」もわざわざ「かきな」と訓め」と注を入れている。「鳴す」は「成す」と同声だが、文字にすると「鳴」と「成」では意味が異なってくる。二重の意味が含ませてある。二神と塩がともに「許袁呂許袁呂邇」と動きを合わせ、絵を画き、鳥のように鳴き、歌い踊り（うたいおどりを書紀では「楽」の字を当てている）、島の形を成すのだ。引き上げた矛先（筆先の喩）から滴り落ちた絵具という言葉いぶりも筆に含まれた絵具が図を画くさまを連想させる。あるいは鑿が土を彫り形を成すさまも連想させる。このくだりは、神々による芸能芸術の始まりのさまを暗示しているのである。

「見立て」という語がここに出でくる。「成成不成合」「成成而成余処」「刺塞汝身不成合処」のところ、性器と男女の性行為の謂、と解釈されているが、たしかに書紀には鶴鶴（せきれい）の仕草を真似たと誌す書も紹介されているから、動物の性行為を連想させるが、言葉を綴っている人の念頭にあるのは、植物の、たとえば南瓜の交配のさまを彷彿させていることにも目を向けておきたい。この辺りの二神のやりとり、総じて芝居じみていることにも注目。